交通事故をなくすには！

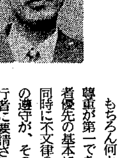
歩行者の言い分 ドライバーの言い分

紙上討論

私たちの意見

「紙上討論―私たちの意見」の一回目は、交通事故をなくすには！のテーマで、歩行者の言い分・ドライバーの言い分を募集しましたところ多数のご意見を寄せていただきありがとうございました。立派なご意見がたくさんありましたが、紙面の都合で全部を掲載できないため、ご意見の内容を中心に、年齢層、男女別などのバランスを考え、今回は七人の方からご登場いただきました。

守ってほしい「道路歩行法」



風間　勲（寄居町　50歳　会社員）

ドライバーに成文化された「道路交通法」が適用されるように、歩行者には不文律の「道路歩行法」が遵守されるべきであろうと思う。まず基本的に歩行者は、絶えず車に気を配る心構えがなければならないという情勢の変化に認識を新たにすべきであろう。

これは悲しいことだが、「何が何でも歩行者優先」という概念は改められなければなるまい。

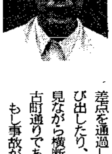
歩車道の区分が明確な道路については両者とも、いまさら要望事項はないはずであるが、依然として信号軽視のクセが時折り散見される。完全に信号が変り終らないうちに行動を始めるセッカチな人で、時間や物質的な損得は、冷静に考えれば大したことではないのに、わずかな時間を「安全の保証」まで待てない人間の心の弱さ、この辺が歩行者がよくよく考えるべきポイントであろう。

しかし、より以上に道路歩行法が適用されるべきは、歩車道の区分のない道路においての歩行ぶりであろう。

基本的にドライバーが歩行者に細心の注意を払うと同じくらい歩行者もまた、常に前後の車に絶えず留意し、横に列を作ったり何かのはずみで中央に寄ったり、車の方でよけてくれるだろうという少々図々しい甘えで歩いていると、不慮の事故に対処しきれないことが多分に起り得る。

もちろん何といっても人命尊重が第一であるから、歩行者優先の基本に変りはないが、同時に不文律の「道路歩行法」の遵守が、その前提として歩行者に要請されるべきものであろうと思う。

信号無視は大人 ことに女性が



色平　清（文京町　46歳　会社員）

歩行者の信号無視の多いのには驚かされます。それも子供よりおとな、ことに女性なのです。

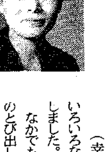
赤信号なのに平気で犬を連れ、ゆっくりと横断する。青信号で交差点を通過しようとすると突然とび出したり、警笛を鳴らしても車を見ながら横断する。特に多い所は古町通りである。

もし事故が起れば、必ずドライバーの前方不注意で悪いことになる。

私も車に乗らない場合、歩行者の一人です。歩行者の交通ルールをじゅうぶん守ってもらいたいのです。事故が起るのも歩行者にも責任があるのです。私たちドライバーもじゅうぶん勉強し、交通ルールを守ります。

「ドライバーも歩行者の身になって運転」「歩行者もドライバーの身になって横断！」―これが大切。標語にも「無理な横断事故のもと」―お互いに交通ルールを守り、交通事故をなくしたいものです。

まだいいかな？が事故に



長谷川　照子（幸西一　46歳　主婦）

モータリゼーションの発展に伴い猫も杓子もハンドルを握り、車、車の洪水の昨今、毎日のように交通事故死が報道されていますが、悲しい限りです。

私は運転免許を取得して十年、いろいろなことを身をもって体験しました。

なかでも、走行中幼な子のふいのとび出しが最も多いことです。車は急には止まらないということを子供に教え、みんなが認識したいものです。

また、横断歩道は歩行者優先でも、安易に手さえ上げれば歩ける場所ではないということも……。

「覆水盆に還らず」と申しますが、大きな事故が起きてからではどうしょうもありません。

思うに、「まだいいかな」という見込こそ、暗い事故をひき起す一因となるのではないでしょうか。

機械が精巧でも扱う人間しだい

堀川　吉太郎（南大畑　80歳　無職）

もともと、道路は人のために造られてあったものである。しかし新旧によらずあたかも自動車のためにあったもののように、自分だけ優悦感をもって歩行者を粗末にしている人種もなかにいる。

酔っぱらい運転者しかり、道路の水溜りを蹴っ飛ばして行く人しかり、迷惑をかけても何んとも思わない人、などいずれも大小の事故を起す候補者である。

一方、信号のない場所に横断のため立ち止っているとき、直前に車を止めて、どうぞ渡ってくださいと手で合図するドライバーもおり、歩行者側としても感謝の合図のうえ渡る。こんな姿をたまに見かけるが、心温まるものがある。

交通マナーを大切にすれば驚くほど事故が激減すると思う。

機械が精巧でも、扱う者の人間が出来ていなければ問題にならない。市民各自の心がけ一つによって交通安全をほこれる市になれるのではなかろうか。

水族館のたくさん魚を入れてある水槽内でも魚同志は正面衝突はしたことがないと聞いたことがあるが、それを人間がなぜできないのだろうか。

交通戦争は人間全部の責任

星野　由美子（附属中2年）

私は普通の歩行者です。この私に思えることは、このごろの大人の人は自動車を運転するということをあまく見すぎていると思います。

自動車は便利、どこへでも行ける、などというような考えで運転免許を取る人がいるのではないでしょうか。確かに自動車は便利です。だけどいつでも人を殺せる最大の凶器です。それを動かすのだから、もう少し考えてほしいと思います。

なかには、いつも心得ておられる方もいるでしょう。でも私は数人などというくらいじゃなくて、運転する方全員が心得てほしいのです。

交通事故のなかで歩行者がドライバーの方に大変迷惑をかけていることが、たくさんあります。

いろいろな実験からわかるように、自動車は急には止まれません。それを歩行者が急にとび出したために事故が起きたという場合は少なくありません。この場合、歩行者が悪いはずです。それなのにドライバーに前方不注意だ、とかで罪をかぶらなければならないのです。

その点でも私たち歩行者はじゅうぶん気を付けなければならないと思います。しかしドライバー側の原因で引逃げするのはもっともひれつなやり方だと思います。

交通戦争といわれる今、一番気を付けなければならないのは、歩行者でもドライバーでもありません。この私たち人間全部なのだと思います。

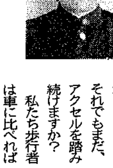
〜次回は〜

40万都市に思う

40万都市〝新潟〟に、あなたは何を思うか。第2回目紙上討論〝私たちの意見〟では、市民の方がたから多数のご応募を、お待ちしています。

応募要領　400字づめ原稿用紙1枚半（600字程度）にまとめ住所・氏名・年齢・職業・電話番号を明記のうえ、市広報課（〒951、市内西堀通6）へ、5月31日までに、お送りください。無記名の原稿は掲載しません。掲載分には薄謝進呈。

ドライバーは急ぎすぎ！



松田　暢夫（青山　18歳　学生）

とにかく、あなたがたドライバーは急ぎすぎています。無理な追越しはするし、横の信号が黄色になればスタートし、左折・右折の時、歩行者にかまわずつっ走り、細い路地でもスピードを出し歩行者の肩をかすめて行く。横断歩道を渡ろうとしている人がいても全然かまわないで走り去る。

これでは私たち歩行者にとって車は走る凶器にほかならないのです。

もちろん、あなたがたドライバーすべてが、そうだとはいいません。しかし先にあげたことは誰れしも経験し、あやうい目にあった人も多いでしょう。

あなたがたにとっては早く目的地に着きたいでしょうし、痛快に飛ばしたいでしょう。しかし道路は車だけのものではなく歩行者のものでもあるのです。道を渡ろうとしている老人もいるのです。

あなたがたは横断歩道で手を上げ、車が止まるまで、ずっーと待ち続けている小学生を見たことがあるでしょう。

それでもまだ、アクセルを踏み続けますか？

私たち歩行者は車に比べれば本当に弱いものです。弱い者を守るのは当然のことではないでしょうか。

あなたたちは、とにかく急ぎすぎています。そして私たち歩行者も。お互いもっとゆとりを持とうではありませんか。せまい日本の中を急いでもしょうがないではありませんか。

3か条の防止対策を国・県に

小林　秀一（古湊町　57歳　理容師）

一年程前、サン化学前を横断中の中年婦人を、バスと、トラック一時停止中の後から、疾走して来た車が、一時停車を怠り、大勢の人たちの目の前で死にいたらしめた悲劇があった。心なき少年ドライバーであったとか。

そこで、私は、歩行者の言い分として国・県に事故防止対策として――

1、満二十歳以下の少年に免許を与えない。

2、特に大型、特殊は満二十五歳か、二十七歳以上とする。

3、二年のち三年ごとに、必ずドライバーの適性検査を行政的に義務づける。

この三か条を提案したい。

私は、職業上、急救病院で、事故者の頭剃りを行なう。頭頂の骨折により、片側の頭が陥没、片側が隆起して、傷の割れ目がざくろのように、ぱっくり魔物のように口を開け、骨が見える時は、レザーを持つ手さえ、わなわな震え、貧血さえ起すかと思うときもある。

ドライバーに見せたいと思う。

国税専門官を募集

☆受付け期間　五月十六日〜五月二十五日

☆受験資格　昭和二十一年四月二日〜昭和二十七年四月一日生まれの男子

☆試験日　第一次試験―七月十四日・十五日

☆問合わせ　新潟税務署（電29 二二五一番）へ。